**待降節第1主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2024年12月1日**

**「久しく待ちにし」**

**イザヤ書60章1～2節**

**60:1 起きよ、光を放て。あなたを照らす光は昇り／主の栄光はあなたの上に輝く。**

**60:2 見よ、闇は地を覆い／暗黒が国々を包んでいる。しかし、あなたの上には主が輝き出で／主の栄光があなたの上に現れる。**

**使徒言行録21章27～36節**

**21:27 七日の期間が終わろうとしていたとき、アジア州から来たユダヤ人たちが神殿の境内でパウロを見つけ、全群衆を扇動して彼を捕らえ、**

**21:28 こう叫んだ。「イスラエルの人たち、手伝ってくれ。この男は、民と律法とこの場所を無視することを、至るところでだれにでも教えている。その上、ギリシア人を境内に連れ込んで、この聖なる場所を汚してしまった。」**

**21:29 彼らは、エフェソ出身のトロフィモが前に都でパウロと一緒にいたのを見かけたので、パウロが彼を境内に連れ込んだのだと思ったからである。**

**21:30 それで、都全体は大騒ぎになり、民衆は駆け寄って来て、パウロを捕らえ、境内から引きずり出した。そして、門はどれもすぐに閉ざされた。**

**21:31 彼らがパウロを殺そうとしていたとき、エルサレム中が混乱状態に陥っているという報告が、守備大隊の千人隊長のもとに届いた。**

**21:32 千人隊長は直ちに兵士と百人隊長を率いて、その場に駆けつけた。群衆は千人隊長と兵士を見ると、パウロを殴るのをやめた。**

**21:33 千人隊長は近寄ってパウロを捕らえ、二本の鎖で縛るように命じた。そして、パウロが何者であるのか、また、何をしたのかと尋ねた。**

**21:34 しかし、群衆はあれやこれやと叫び立てていた。千人隊長は、騒々しくて真相をつかむことができないので、パウロを兵営に連れて行くように命じた。**

**21:35 パウロが階段にさしかかったとき、群衆の暴行を避けるために、兵士たちは彼を担いで行かなければならなかった。**

**21:36 大勢の民衆が、「その男を殺してしまえ」と叫びながらついて来たからである。**



**「久しく待ちにし　主よ、とく来たりて、**

**み民のなわめを　解き放ちたまえ**

**主よ主よ、み民を　救わせたまえや。」**

**先ほど共に讃美歌94番を讃美しました。私はこの讃美歌を聞くと「ああ、今年もアドベントが来たな。クリスマスが近づいたんだな」と思います。**

**私は諏訪教会に遣わされて2回目のクリスマスを迎えようとしています。昨年、初めて迎えたクリスマスは24日が日曜日ということもあり、聖夜礼拝は行いませんでした。朝のクリスマス礼拝と礼拝後の祝会が大きな祝福の内に行うことができました。新型コロナの影響でできなかった祝会が数年ぶりに行うことができて大きな喜びに包まれました。祝会も終わり皆さんを送り出して私は後片付けをしている時に教会の電話が鳴りました。「クリスマスイブの行事はありますか」との問い合わせの電話でした。私は今年は24日が日曜日なので夜の行事は行わない旨をお伝えすると、電話先の方は「そうですか・・・」ととても残念な様子でした。私は何かとても申し訳ない気持ちになりました。クリスマスイブは教会で過ごしたいと思われている、もしかしたらクリスマスの雰囲気を味わいたいという思いなのかもしれませんが、それでも教会に行きたいという思いを持っておられる方がいるというのは嬉しいことだと思います。**

**今年は24日午後5時から聖夜礼拝を行います。そして聖夜礼拝と22日のクリスマス礼拝の案内を記したチラシを来週礼拝後に近隣に配布します。チラシを見た一人でも多くの人がクリスマスを教会で過ごして欲しいと祈り願っています。そして、クリスマスの本当の意味をぜひ心に留めて欲しいと祈り願っています。**



**第3次伝道旅行の最後にパウロはエルサレムに行きました。エルサレム教会はパウロを歓迎してくれて多くの異邦人がイエス様の十字架と復活を信じて信仰に導かれたことを喜び神様を讃美したのですが、ユダヤ教から改宗したユダヤ人たちは自分たちが神様の律法を変わらずにきちんと守っているのに、パウロが伝道旅行でユダヤ人たちに律法を守る必要がないことを伝えていると言いがかりをつけてきました。それは全くの誤解なのですが、パウロは救われるのにはユダヤ人も異邦人もない、ただイエス様の十字架と復活を信じて受け入れればいいと主張をしているのがユダヤ人たちは律法を軽んじていると受け止められたのです。**

**エルサレム教会の指導者ヤコブはパウロがきちんと律法を守っていることを証明するために、誓願を立てる4人と一緒にエルサレム神殿に行ってその費用を出して欲しいのとパウロも清めの儀式をして欲しいと教会の命令を伝えました。パウロは何も反論することなく教会の命令の言葉に従ったのです。パウロは実際はこんなことなどする必要がないとわかっていたのですが、教会のために、どこか律法ばかりを重んじて福音が欠けているような教会が福音に立ち帰って欲しいそのためにエルサレム神殿で清めの儀式を行ったのです。**

**そして、その清めの儀式がもうすぐ終わろうとしている時に事件は起きたのです。時は五旬節です。ペンテコステの時です。諸外国から多くのユダヤ人たちがエルサレム神殿で礼拝をするためにやってきていたのです。その中にアジア州から来たユダヤ人たちがいました。彼らはパウロが伝道旅行でアジア州各地を回っていた時に恐らくパウロを実際に見たのでしょう。彼らはパウロがエルサレム神殿のユダヤ人しか入れない境内に異邦人トロフィモを連れ込んで聖なる場所である神殿を汚していると勘違いしたのです。**

**「イスラエルの人たち、手伝ってくれ。この男は、民と律法とこの場所を無視することを、至るところでだれにでも教えている。その上、ギリシア人を境内に連れ込んで、この聖なる場所を汚してしまった。」（28節）**

**律法を軽んじて、聖なる場所を汚す、つまり神を冒涜しているとユダヤ人たちは思って多くの群衆を扇動してパウロを捕らえて、境内から引きずり出して、暴行を加えたのです。**

**ローマの千人隊長、つまり異邦人にパウロは助けられました。千人隊長は暴動を静めなければならないためにそうしただけですが、結果的にパウロは助けられたのです。千人隊長はこの暴動の真相をつかもうとユダヤ人たちに尋ねますが、人々はあれやこれやと騒ぎ立てるだけで全く要領を得ないために、パウロを兵営に連れて行くように命じました。それでもユダヤ人たちの騒ぎは収まらず兵士たちはパウロを担いでいかなければならないほどでした。36節にはこうあります。**

**「大勢の民衆が、「その男を殺してしまえ」と叫びながらついて来たからである。」**

**「その男を殺してしまえ」と大きな声で叫ぶ群衆の姿です。**

**私は今日のこの一連の場面である二つの場面が思い浮かびました。**

**一つはステファノが殺害された場面です。使徒言行録6：8から記されている物語が今日の物語と似ているように思いました。ステファノはユダヤ人たちから、神と律法を冒涜し聖なる場所である神殿を汚していると言いがかりをつけられて裁判の場に立たされました。聖霊に満たされたステファノは神様の愛の歴史、イスラエルの救いの歴史を語り救い主イエス・キリストの到来を語りました。そのステファノの説教を聞いていたユダヤ人たちは激しく怒りステファノを都の外に引きずり出して石を投げつけて殺害したのです。そして、その殺害の場にサウロ、今のパウロがいてステファノの殺害に賛成していたのです。この時のユダヤ人たちは激しく怒りに燃えて、皆で石を投げつけて無抵抗のステファノを殺害してしまうという、石打の刑は律法で定められた処罰方法ですが、怒りの感情に任せてきちんとした手続きを得ないで人を殺害することは決して認められていることではありません。ユダヤ人たちはステファノが神と律法を冒涜し神殿を汚していると主張しながら、実は自分たちこそが律法を破り人の命を奪っているのです。もはや感情に任せて自分が何をしているのかわからない状態でステファノを殺害したのです。**

**もう一つはイエス様の十字架の場面です。エルサレムにおいてイエス様が苦しめられて人々から「殺せ、殺せ、十字架につけろ」と叫ばれて十字架へと歩まれる場面は、パウロが「その男を殺してしまえ」と叫ばれた場面と重なります。ユダヤ人指導者たちによってイエス様が捕らえられたのは、イエス様が神と律法を冒涜し神殿を汚していると判断されたからです。イエス様が人々が待ち望む救い主が自分であり、自分は神の子であると主張をしたからです。ユダヤ人にとってそれは神の冒涜であり、決して赦せないことでした。そして、裁判にかけてイエス様を死刑にする罪を見いだせないポンテオ・ピラトにユダヤ人たちは「殺せ、十字架につけろ」と激しく叫び続けて、ピラトは人々の要求を受け入れてイエス様を十字架につけざるを得なくなりました。「殺せ、殺せ、十字架につけろ」と叫び続けた多くの人々はもはや自分が何をしているのかわからなくなっていました。自分たちこそがイエス様を十字架につけて殺すという大きな罪を犯しているのに、もはや自分がなにをしているのかわからない状態でした。**

**ステファノが殺された場面でも、イエス様が十字架で殺された場面でも、そしてパウロの逮捕の場面でも「殺せ、殺せ」と人々はもはや自分が何をしているのかわからない中で大きな罪を犯してしまうのです。何度同じ過ちを繰り返すのでしょうか。**

**けれども、私たちはこのユダヤ人たちはひどい奴らだ、けしからんと批判をすることはできないのです。彼らの姿は私たちの姿です。私たちが「殺せ、殺せ、十字架につけろ」と叫ぶ群衆の中にいたら、「いやそれはおかしい間違っている」とはっきりと言うことができるでしょうか。私は絶対に「殺せ、殺せ、十字架につけろ」と叫ばない、私はイエス様を十字架につけないなどと言えるでしょうか。私はできないと思います。おそらく周りに流されて、自分が何をしているのかわからなくなってしまって、一緒になって「殺せ、殺せ、十字架につけろ」と叫んでしまうのではないかと思うのです。何が正しいのか、何が間違っているのかもわからずに、神様に御心を求めて祈ることもなく、周りに飲み込まれてしまって一緒になって「殺せ、殺せ、十字架につけろ」と叫ぶ群衆、その中に私たちはいるのです。そこに私たちの弱さがあり、私たちの闇があり、そこに私たちの罪があるのです。**

**パウロは千人隊長という一人の異邦人に助け出されました。彼が来なかったらパウロは確実に死を迎えていたでしょう。そしてもしパウロがこの時に命を落としていれば、世界中に福音が広がることがなかったかもしれません。もちろん千人隊長はパウロを助け出そうという思いはなくて、彼はただ自分の職務に忠実な行動をしただけです。けれども私はここに神様の導きがあると思います。**

**一人の人によって救われる。何か象徴的な行為のような気がします。**

**「ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。権威が彼の肩にある。その名は、「驚くべき指導者、力ある神／永遠の父、平和の君」と唱えられる。」（イザヤ9：5）**

**クリスマスの時に読まれる聖書箇所です。イエス様は一人のみどりごとして、ひとりの男の子として私たちが生きるこの世界に生まれてくださいました。神様に背き、自分が何をしているのかわからない中で罪を犯してしまう弱い私たちの罪を赦し、贖うために十字架に掛けられて死を遂げるために生まれてくださったのです。イエス様は「殺せ、殺せ、十字架につけろ」と叫ぶ群衆の一人である私たちの罪を赦すために、「父よ彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです」（ルカ23：34）と私たちのために十字架上で執り成しの祈りをして下さり、十字架上で死を遂げられて、葬られ、3日目に死から甦って復活されて天に昇られてやがて再び私たちの元に来て下さる、そのためにお生まれになられたのです。その私たちの救い主であるイエス様の御降誕と再臨を待ち望むのがアドベントなのです。アドベントのこの時私たちはイエス様の十字架の愛に心を留めて共に歩んでいきましょう。**